紡ぐ花伝書

花梅

百　歳　書　店

先代の口癖

何でもやってみたらええ。
口があるなら、すぐに人に問うていこう。
ひとつのことをしっかりやれ。

先代の名言

商売人なら断るな
一本の花をあきらめずに探せ

続けてきたこと

お花の細やかなニーズは、時代や流行とともに変わりますが、冠婚葬祭とまとめられる人生の節目のような時に特に求められるということは時が流れてもあまり変わりがありません。

歓喜の分かち合い、御祝の気持ち、悲しみの折、感謝、おもてなし、心の安らぎ…、百年ずっと花は人の営みに添い、人と人とのコミュニケーションをとりもつ存在でもありました。

毎日様々な理由で花を求めにくるお客様のそれぞれの要望を満たすために、一件一件向き合って接客し続けてきました。

変えたこと

本店を軸とし、より幅広いお客様に利用していただけるよう支店や部門を増やしてきました。

お茶をたのしめるカフェを設け、そこに装花する空間を提供することで、花が暮らしを彩る大切な役割を担っていることの模範例として示せたように感じています。

花を扱うということにおいて、伝統と流行の両方を知ることは昔も今も大切であり、花いけの方法、その良し悪しをジャッジするお客様の顔色や世の中の風潮というものにも敏感であることは花屋として常々求められるものでありました。

代々続くお店を維持し続けるためには、修正と修復、新旧の見極めの変化が必要であると思うので、そのために変えたことはたくさんあります。

よかった決断

LUCEとラバーリーという支店と部門を増やしたことは良かった決断かと思います。
新鮮さや情熱のようなものは革新に繋がり、惰性をうちやぶる利点や栄養になるものだと感じています。
様々な見せ方を提案することで、花梅のバリエーションを増やすことができたように思っています。
時が経って、あの時あの決断をしてよかったと思えれば良いなぁと思います。

創業年

大正１１年　１９２２年

どのように始まったのか

㈲花梅は、大正十一年創業の生花店です。来年百周年を迎えます。当初は八百屋のようなお店で、生活に必要とされるお花もいっしょに売るようなお店で、その後生花販売業にしぼったと聞いています。創業者の名前「梅太郎」から一字をとって「花梅」となりました。支店であるLUCE hanaume（ルーチェ ハナウメ）は、２００２年8月にオープンしました。花梅本店で各流生け花関係を充実させ、LUCE店ではよりフラワーギフトに対応できるようにとの思いで増店しました。２０１０年には、同敷地内に新たな部門としてgaouv rabari（ガーンヴ ラバーリー）をオープンし、昨年十周年を迎えました。ラバーリーではカフェ営業と物販をしています。グラノーラは、コロナ禍でカフェの通常営業が難しくなった２０２０年春に考案し販売を開始しました。

商品に対する想い

グラノーラを制作販売するに至った背景としては、カフェでドライフルーツやナッツを使用したメニューが既にあったので、それらを使って持ち帰りができるすこし日持ちのするお菓子が作れたらと考えたところからです。ラバーリーは、アジア・アフリカ・中近東辺りの異国の雰囲気を提供しているので、作るグラノーラもoriental,exoticをまとわせようと、地域ごとの特産物やイメージを瓶のなかで具現化しようと材料を組み合わせました

"Maghreb（マグレブ）"は、北アフリカ・マグレブ地方のイメージ

"Siam（サイアム）"は、東南アジアの南国イメージ

"O'zbek（ウズベク）"は中央アジア・ウズベキスタンのイメージ

保存料不使用で、蜂蜜・デーツシロップ・アガベシロップ・希少糖・きび砂糖などの

甘味、シナモン・カルダモン・ジンジャーなどのスパイスもグラノーラごとに違えて、できる限り、信頼できる良い材料を入手しています。

古今、人間は植物からたくさんの恩恵をうけてきました。直接的にも、間接的にも。生きるために、暮らすために必要とされる衣食住の多岐にわたり花や草木はいつもどこかで人間を支えてくれています。

花を愛でその美しさに心が救われることの一助となる花屋としての努め。それと同じように、その派生として、実りをつめこんだグラノーラがどなたかの口福に繋がればうれしいなと思っています。

今後の展望

花梅本体の生花販売事業を更に肉厚にしていきながら、カフェやグラノーラなどといったお花とは違うものたちとうまく組み合わせることで、花の需要を増やしていければと思っています。

グラノーラに次ぐ革新的な何かを制作したいとも考えています。

開業百年という節目のタイミングで、百歳書店さんにお声がけいただきご縁を感じています。代々続くこの流れを止めてしまわないように、目の前の仕事に一生懸命でありたいと思っています。ひとつひとつの仕事をこなしていくことは地味かもしれませんが、継続の柱だと思っています。